

即ち是れ。  
尊氏、京師に在り。

正平十三年四月二十日、疽、背に發して、疼、骨を刺す、外科の醫師、手を盡して、治療を施せども、効なく、諸宗の高僧、心を籠めて、祈禱を行へども、驗なし。

鬼や譴むる、痛楚、錐を揉むが如く、神や棄つる、疲々、肉を削るが如く、衰弱、日々に加はりて、一縷の望もなく、其月二十九日の寅の刻、終に息を絶つ、年五十四。

中一日を隔て、洛北衣笠山麓の禪刹等持院に葬むる。

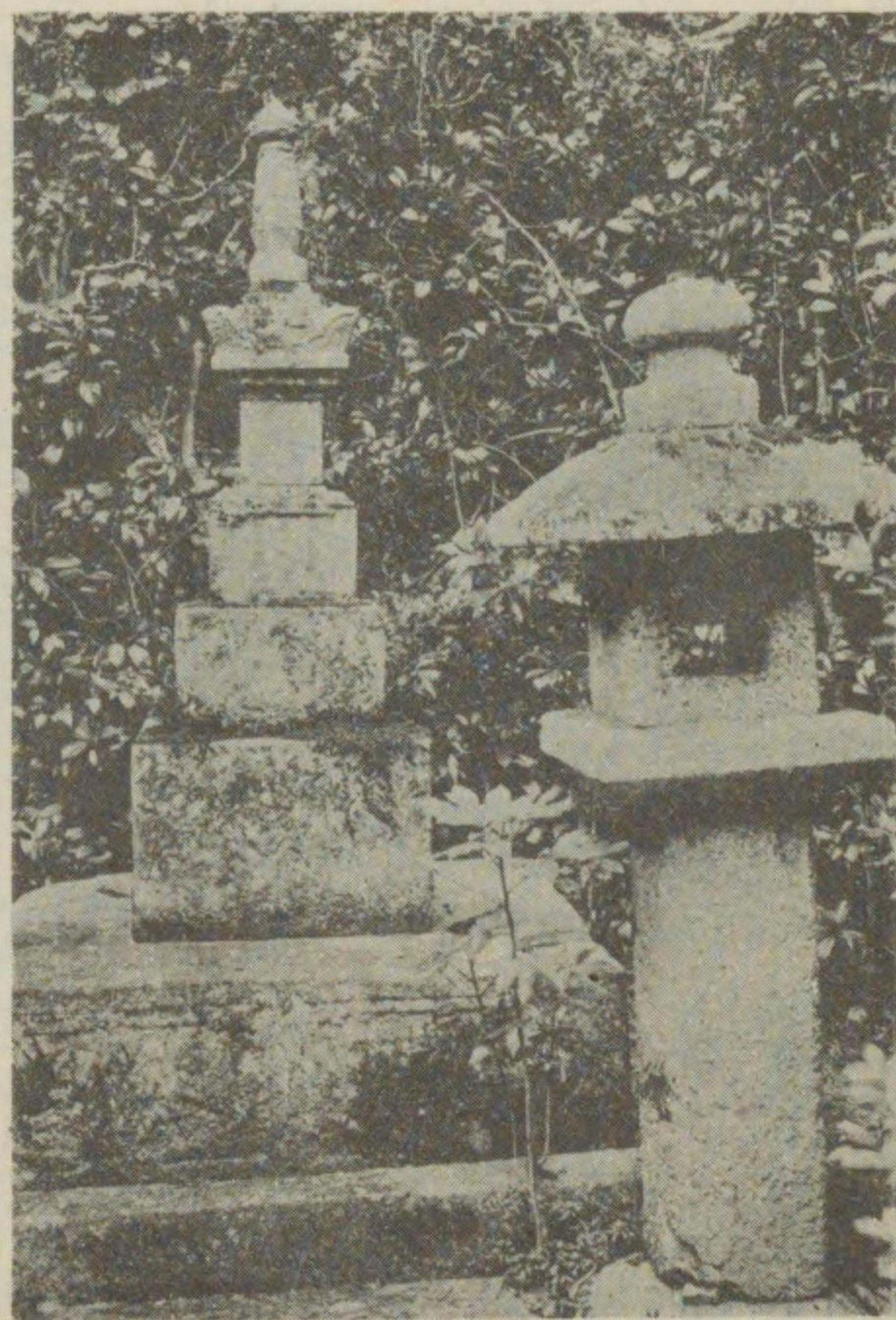
六月三日、後光嚴天皇、日野左中辨忠光を、其邸に遣はして、左大臣従一位を贈らせ給へば、義詮、感激の涙に咽びつゝ、

歸るべき道しなければ位山

のぼるにつけて濡る、袖かな

との一首を詠ず、忠光、還りて、此事を奏聞すれば、天皇、深く歎感あらせ給ひ、京極爲定に命じて、新千載和歌集を撰ばしめ給ふに及び、之れを其哀傷の部に入れしめ給ふ。建武中興の大業、終に成りて、南北兩朝の抗爭、忽ちに起

足利尊氏の墓  
京都市上京區等持院町の等持院に在り。

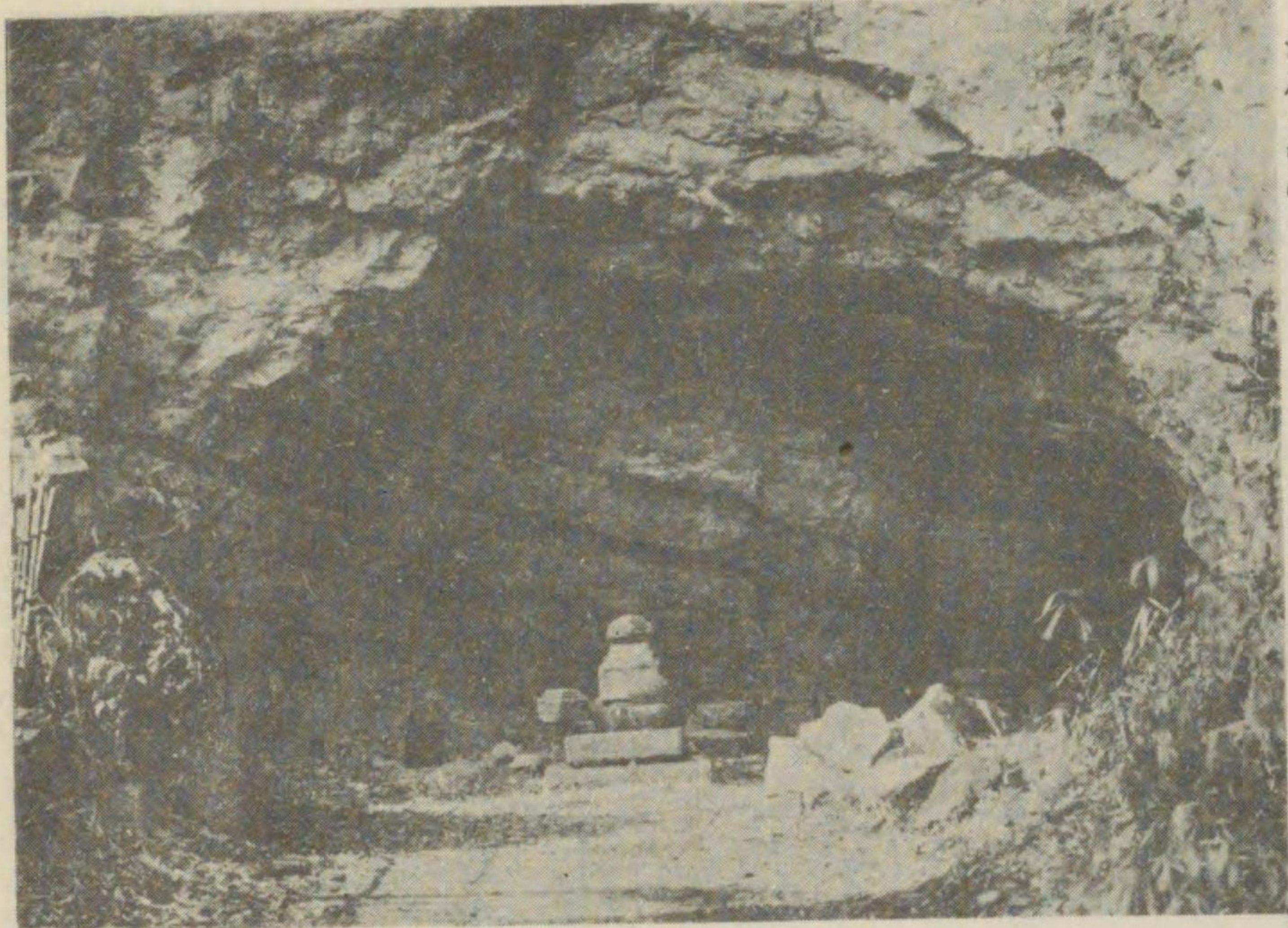


り、天下粉々、亂麻の如く、海内洶々鼎沸の如く、蒼生、皆、塗炭の苦に喘ぎ、溝壑の難に叫ぶこと、此に二十餘年、爲めに、國財を糜し、民命を損すること、其幾許なるやを知るべからず、是れ皆、此賊の致す所ならずんばあらず。天下の醜惡文字を集め盡すも、其惡を評するに足らざるは、此賊なり、古來の詆罵言辭を合せ盡すも、其罪を責め盡すに足らざるは、此賊なり、何ぞ、其官を褫ぎ、其位を奪う

て、永く天下後世の嚴戒となさざる。

鎌倉龜ヶ谷切通坂の西角に、長壽寺あり、山門を入りて、

足利尊氏の石塔  
相模國鎌倉郡小坂村山ノ内長壽寺の中に在り建つれば崩さるゝもの。



右手の行き當りに、岩窟あり、中に、足利尊氏の墳あり、何者か、之れを倒す、寺僧、之れを起せば、又倒し、又起せば、又倒して、際限なければ、終に其儘に、捨て置く、十餘年前、

著者の此寺に詣りし時も、墳は、バラバラとなりて、倒れ居たりき、之れを倒せるものは、一人の所爲にはあらず、此處に来るものは、次々に倒して、公憤を漏らせるものなるべし、事こそ異なれ、志士の其木像の首を切つて、三條河原に梟したるもの、其意、亦、同じ。

### 矢口渡

新田義興戦死の地

矢口渡は、武藏國荏原郡矢口村大字矢口より、其對岸なる橋樹郡川崎町に達する多摩川の渡船場にして、今は、一方は、東京市となり、一方は、川崎市となる、渡頭に、長杉あり、一本杉の名、古より高し、矢口村の隣邑に、六郷村あり、故に、此あたりの多摩川を、六郷川とも稱す。

正平十一年十月十日、江戸堯寛、竹澤良衡等、計りて、新田義興を、此處に殺す、村内に、新田大明神あり、義興の靈を祀る、此祠より、東北二町の所に、十騎大明神

あり、義興の従士井伊直秀、世良田義周、大島周防、土肥三郎左衛門、市河五郎、由良兵庫助、由良新左衛門、南瀬口六郎等、十人の靈を祀る。

一

武藏野の戦、敗れて後、新田左兵衛佐義興、其弟武藏守義宗、従弟脇屋左衛門佐義治の三人、其半國を定む。

武藏、上野の豪族、其一人を推して、義兵を擧げんと欲し、誓書を送りて、切に出馬を請ふ。

義宗、義治の二人は、容易に信ぜず、

『此頃の人心、左右なく、頼みがたし』

敢て聞き入るべき氣色もあらず。

義興、精悍の氣溢る、ばかり、奇功を建てんと欲するの心、特に深し、

『さらば、我れ行かん』

従兵僅かに百餘人と與に、越後を發して、武藏に入る、武藏、上野の従士、大に喜びて、心を屬す。

義興、兩國の間を來往して、義故を糾合す、子は、親に明かし、兄は、弟を誘ふ、其れより、其れへと、傳はりて、

事、何時しか、鎌倉に聞ゆ。

鎌倉の管領足利基氏、及び執事畠山國清、時に、入間川の廳に在り、之を患ひて、百方、其所在を索む。

義興、諸豪族の間を、轉移して、神出鬼没、得て端倪すべからず。

國清、大兵を遣はせば、潛みて、出でず、小勢を遣はせば、突然、襲うて、之れを破る。

國清、憂慮措かず、首を低れ、腕を拱きて、思案に暮る、こと旬日。

一夕、忽ちハタと、横手を拍ちて、ほ、笑む、急ぎ竹澤良衡を招き寄せ、膝を進めて、

『如何に右京亮殿、御邊、功名を立てん御心の候まじきか』

と問ふ、良衡、訝かしげに、其顔を打ち守りつ、

『某、御味方に付き參らせてより、日夜、忠勤を抽んでんとこそ存じて候へ、粉骨碎身、只、御指圖に従ひ候はん』

と答ふれば、國清、

『さらば、御邊に頼みたき一事あり、御邊は、先年、武藏野合戦の時、左兵衛佐義興の手に屬きて、手柄ありしところ、承はりつれ、左兵衛佐も定めて、舊好を忘れ候まじ、此人を騙かりて、討たんもの、御邊に過ぎたる人は候はじ、如何なる謀をも運らして、左兵衛佐を討ち取り給へ、恩賞は、望みに任せ候はん』

と叫く、良衡は、義に疎く、情を知らず、唯、利慾の心のみ深し、

『易き程の事にこそ、さらば、斯様に計り候はん』

一際、聲を潛めて、何事をか語れば、國清、笑みを含みて、打ち點頭づくこと、數多度。

二

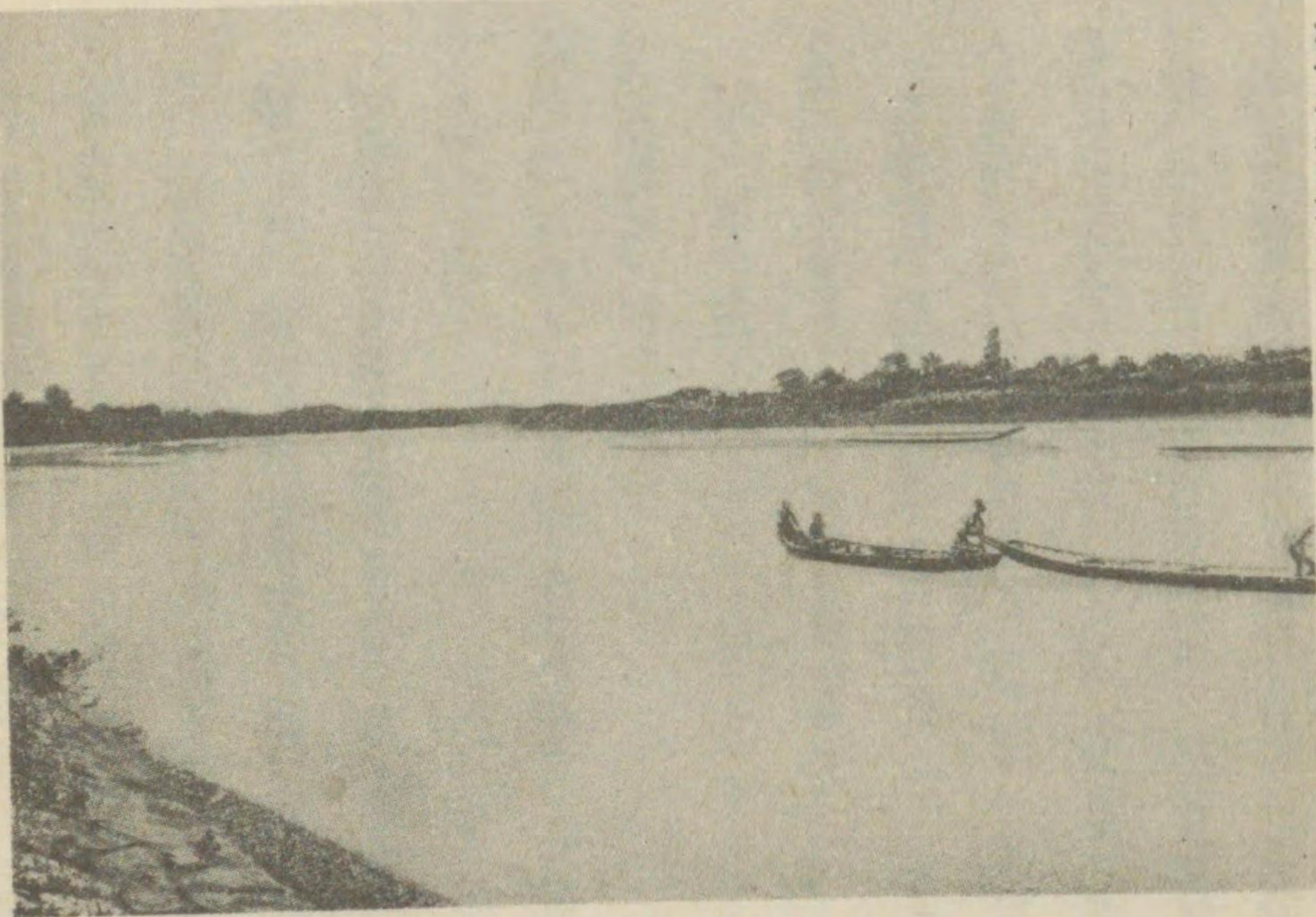
良衡の行跡、何時となく、放縱に流れ、日夜、無頼の徒數十人を集めて、妓を招き、酒を被り、酔ひては、博奕を事として、世をも、人をも、憚からず。

心あるもの、懇ろに諫め止むれども、イツカナ、聞き入れず。

此事、國清の耳に入れば、以ての外に憤ほる、

矢口渡

六郷川  
六郷川は多摩川の下流にして武藏國橘樹在原兩郡の界をなせる邊を六郷川と曰ふ。



風儀を紊らん、急ぎ罪科に行ふべし』

『世には、道理を破るの法こそあれ、法を破るの道理なし、右京亮の法を破るの所業、不届至極にこそ、凡、法は一人を罰して、萬人を助けん爲めぞ、若し、緩怠の沙汰に及びなば、終に諸人の』

直に良衡の領邑を没して、追放に處す。

良衡、敢て罪を謝せん氣色もなし、

『あな事々しや、左馬頭殿基氏に仕へざればとて、身一つを過されぬ事のあるべきや、要こそあれ』

其儘、馳せて、領邑に還る。

武藏國比企郡竹澤村は、元、竹澤郷と稱す、竹澤左近將監の所領なり、竹澤良衡の領邑も此あたりに在りしならんか。

居ること數日、家人に向ひて、

『我れ、此儘に在らんは、危ふし、早く官方に隨ひ奉つらんこそ、安全なれ、此頃、左兵衛佐殿、當國に忍びて在はずと聞き及ぶ、イデヤ、此殿の御手に付き奉つらん』と語り、密かに、使者を、義興の許に遣はして、

『親にて候ひし入道は、故殿の御手に屬きて、鎌倉の合戦に、忠戦を勵み、某も、亦、君が御旗に附きて、武藏野の御合戦に、涯分の力を盡し候へること、定めて、君にも思召し忘れさせ給ふまじ、爾來、轉變、數度に及びて、御座所をも存知仕つらず、暫しの命を助かりて、御

代を待ち候はん爲め、心ならずも、足利殿に従ひ候へるに、心中の不快、自づから、色に顯はれ候ひけん、さしたる過失もなきに、一所懸命の地を召し上げられ、剩さへ、追討の沙汰に及ぶなど聞えて候へば、今は、姿を隠くして、山林に潛み候ひぬ、あはれ、此間の不義を免させ給へ、身命を抛ちて、君の御大事に代り奉つり候はん』

三

良衡、待てども、見參の機を得ず、

『此上は、我が貳心なき證據を見せて、近づき奉つらん』人を京師に遣はして、遙るゝ召し下したるは、然る宮の御所に仕へまつりし少將と呼べる十六七の女房。

良衡、美々しく、装ひを凝らして、義興の許に差し遣はし、  
『某が養ひ娘にて候もの、御徒然の御慰みに、不束なる調にても、聞こし召され候べし』

と言ひ入る、義興、傍近う召し見れば、實にや、絶世の美

人、水を離れし蓮の花の姿清く、旭に匂ふ櫻の花の氣品高し。

義興の喜悅、言ふばかりなし、一夜、見ざれば、十年も、逢はざる心地しつ、繁げゝ、召し寄せて、深く語らひ、是れより後は、復た常の隱家をも變へず。

少將、折を見て、良衡の他事なき志を訴ふれば、義興、今は、心を置ける狀もなし、

『何か苦しからん、疾く對面せん』

急ぎ使を馳せて、良衡を召し見る。

『我が望み、今こそ、達しけれ』

良衡の喜び、言はん方なく、鞍馬三頭、甲冑三領を、義興に獻じ、尙、軍馬、甲冑、衣装、刀槍の類を、諸將士に贈れば、

『扱てゝ、深き心入れ、忝うこそ候へ』

何れも、皆、悅に入る。

良衡、今は、義興の意にも適ひ、諸將士の望をも博して、日夕、忠實々々しく事ふること半年あまり。

夏も過ぎ、秋も深けて、今日は、九月十三夜、晝よりの微

雲、散じ去りて、宵よりは、満天、拭へるが如し、白露、江に横はりて、大月、空に懸かる。

良衡、急ぎ義興の館に詣りて、

『今宵は、名月の夜にこそ候へ、これより、某の茅屋へ入らせ給ひて、草深き庭の月をも、御覽候へかし、御内の人々をも、慰め參らせん爲め、白拍子共をも、少々、召し寄せて候』

と申せば、義興、

『そは興ある遊ぞ、參るべきにこそ』

即座に、承引すれば、從士、亦、皆、悅ぶ。

聽て、馬に鞍置かせて、立ち出でんとす。

會々少將の許より、消息あり、義興、披き見れば、  
『過ぎし夜、御事の悪しき夢を、見參らせて候、夢解に問ひて候へば、重き御慎みにて候、七日が間は、門の外へ、御出であるべからずと申して候、呉れゝも、御身を慎ませ給へ』

染みゝと書き記す文句に、真心の溢るゝばかり、  
『此事、如何あるべきぞ』

義興、密かに、執事井伊直秀を召して問へば、

「凶事を聞きて、慎まずと申すことや候べき、今夜の御遊をば、差し控へさせ給はんこそ、然るべけれ」と答へて、固く押し止む、

「さらば、見合はさん」

義興、急に思ひ止まり、

「俄かに風氣の心地にて、堪へがたし、今宵は、見合せ候べし」

それとなく断わりて、良衡を還へす。

良衡、折角の企畫、畫餅えび餅に屬して、心、安からず、

「兵衛佐殿の、一旦承引し給ひながら、俄かに、沙汰止みとなりしこそ、心得ね、必定、仔細あらん」

密かに、容子を探ぐれば、少將の消息を得てより、急に模様の変りしこと分かる、

「扱ては女奴、内々、我が企てを推したるにこそ、畜犬に、手を咬まれしとは、實に此事ぞ、好しく、要こそあれ」

良衡、獨り頻りに、打ち頷づく。

矢口の渡  
武藏國荏原郡矢口村より橘樹郡川崎村に渡る要津にして江戸より鎌倉に至る街道に當る圖中の高樹は有名なる一本杉なり。今は東京市と川崎市との渡津となる。



はる事の候ひて、引き籠り候にこそ、頓て、見參に入り

其夜翌より、少將、更に、姿を見せず、  
「昨日も來ず、今日も見えざるこそ、不思議なれ」  
義興、思ひあまりて、窃かに、文を遣はせば、  
「いた

候べし」

と其人にはあらぬ良衡より申し來る、義興の本意なき、言ふばかりなし。

四

良衡の義兄江戸堯寬げうくわん、稻毛十二郷を領す。

畠山國清、俄かに、其所領を没して、其地に、關所を設く。堯寬、大に怒りて、稻毛に馳せ歸り、關吏を追ひ拂ひて、城に立て籠る。

「此上は、畠山殿に向ひ、一矢射て、討死すべし」

一族以下の兵、聞いて、馳せ集まるもの、五百餘騎。

堯寬、更に、良衡に頼りて、義興の方に、

「畠山殿、故なく、懸命の地を沒收せられて候へば、今は、身を置くべき所とも候はず、此上は、一族共を引率して、鎌倉殿の御陣に、馳せ向ひ、畠山殿に向ひて、一矢射んと存するにこそ、但し、然るべき大將を仰ぎ奉つらでは、軍兵の心を繋ぎがたし、佐殿をこそ、頼み奉つらん心底に候なれ、先づ忍びて、鎌倉へ御越しあらせ候へ、鎌倉中に、當の一族、少なくとも、二三千騎は候は

ん、其勢を附けて、相模國を打ち隨へ、東八ヶ國を根據

として、天下を覆へすべき謀略を運らし候はん」

と申し入るれば、義興、大に喜び、

「汝の一族と聞きては、最と頼母しくこそ存ずれ、此上

は、急ぎ鎌倉に打つ立ち候はん」

俄に檄を傳へて、武藏、上野、常陸、下總の兵を集めんと欲す、良衡、

「多勢を率ゐて、進ませ給はゞ、敵も、軍兵を以て要所に防ぎ候はん、斯くては、勝負の程も、計り知られ候はず、唯々、小人数を以て、忍んで、鎌倉へ入らせ候へ、鎌倉へだに入らば、御味方の勝利、疑ひも候はず」と申せば、義興、

「實に汝の申す所ぞ、さらば、此處に居る者共のみを隨へて、出發せん」

執事井伊直秀、及び世良田義周、大島周防、土肥三郎左衛門、市川五郎、由良兵庫助、由良新左衛門、南瀬口六郎等、僅かに十三人を隨へて、出發するに決す。

五

十月十日の朝、義興、十三士を随へて、程に上る。田圃の間を過ぎて、矢口の渡に抵れば、一舟あり、岸に巖して待つ。

義興主従、先づ此れに乗ずれば、舟夫二人、舳艫に在りて、櫓を漕ぎ、櫓を操る。

中流に到る頃、忽ち櫓を棄て、櫓を流し、前後の栓を抜き去りて、ザンブとばかり、水中に躍り入り、抜手を切つて、洄ぎ去る、

「扱てこそ、不審なれ」

と思ふ間もあらせず、河水混々として、噴き入り、船體半ば沈まんとす。

忽然として、金鼓の聲、前岸に響き渡れば、三百餘騎の伏兵、手にく、弓矢を携へ、樹の陰、岩の陰より、現はれ出でて、ドツと、鯨波を揚ぐ、

「敵は、何者なるぞ」

義興、砦と陸上を見遣れば、江戸堯寛、眞先に在り、

「扱ては、這奴に計られたるか」

言、未だ終らず、後への岸にも、又ドツと鯨波の聲起る。

義興、憤然として、顧みれば、百五十騎ばかりの兵士、バラバラと、岸頭に立ち現はる、其大將は、竹澤良衡、

「扱てく、憎きは、彼奴ぞ」

義興、大の眼を、赫と、見開きて、グツと其顔を睨む。

六

良衡、徐々と、馬を進めて、義興の方を見遣りつ、

「如何に義興、能く承はれ、我れの所領を没収されしは、汝を騙からん爲めの計略ぞ、少將を任せたるは、汝に取り入らん爲めの方便ぞ、然るに、九月十三夜、汝を誘き寄せて、討つて取らんと計りつるに、少將、一旦の情に絆されて、我が企てを阻みたる疑ひあり、因りて、刺し殺して、堀に打ち棄て、更に、一族江戸遠江守を招き寄せて、手段を運らし、是れまで、汝を誘ひ出だし、ものぞ、今は、遁れぬ所と観念せよや」

始めて、明かす是れまでの悪策。

従兵、箆を叩いて、ドツと笑へば、前岸の兵、亦、口々に囃し立つ。

義興、怒髪、天を衝く、

「扱ても、日本一の無道人共に、騙かられぬること、無念至極なれ、見よく、七生までも、汝等の爲めに、今日の恨みを報ゆべきぞ」

キリくくと、切齒する状、見るさへも、物凄まじ。

水は、益々湧きて、船は、益々沈む。

井伊直秀、兩の手に、義興を抱きて、宙に差し揚ぐれば、

「今は、是れまでなるぞ」

義興、腰なる刀を抜きて、左の脇に、グサと突き立て、右の肋の骨まで、バリくくと、掻き切ること二たび、兩眼を、赫と、見開きたる儘、息絶ゆ。

「さらば、御供仕つるべし」

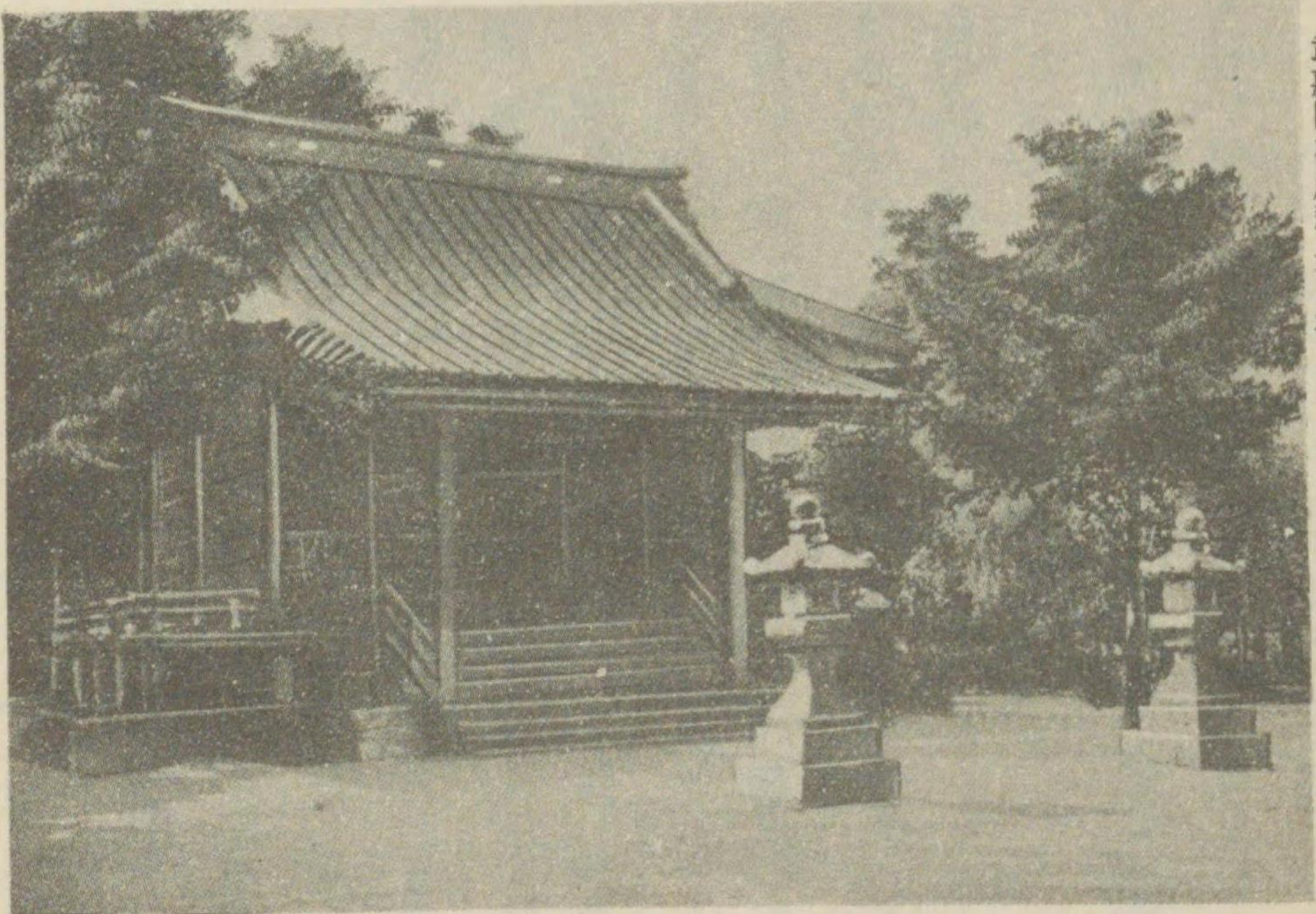
直秀、亦、腹を掻き切つて、腸を河中に投げ入れ、咽喉を掻き切ること、二たび、自ら首を擱んで、後にヘシ折りつつ倒る、壯烈、前古に比なし、

「イザく、刺し違へ候はん」

世良田義周、大島周防の二人、各々刀を抜き持ち、ツブリと、柄の根まで、突き通し、引つ組み合うて、川へ飛び入

新田大明神

武藏國荏原郡矢口村に在り新田義興の靈を祀る。



るさま、亦、目覺まし。由良兵庫助、由良新左衛門の二人、舳と、艫とに突つ立ちて、前後の敵を睨めつつ、サツと、刀を抜きて、逆手に持ち、ブツリと、己が首を掻き落す、

「臆面臆

面、腹切らんは、無念ぞ、イデく、目に物見せん」

土肥三郎左衛門、南瀬口六郎、市河五郎等、手早く衣類を

脱ぎ捨て、裸體となり、太刀を、口に咬へて、ザンブと、河中に躍り入り、水底を潜り、前岸に駆け上がる、

『江戸堯寛何處に在るぞ、イザ見参せん』

サツと、太刀を揮うて、躍り進む。

敵兵、驚いて、遮り戦ふ。

決死の鋒尖、火よりも烈し、三郎左衛門等、踏ん込み奮ひ闘ふこと、半時ばかり、敵兵五人を倒し、十三人を傷つけて、同じ枕に討たる。

義興主従十四人、皆、死すれば、勝鬨の聲、前岸、後岸、一時に湧く。

七

良衡、堯寛の二人、舟夫に命じて、水中を捜し索め、盡く屍骸を尋ね出だして、其首を取る。

『さらば、畠山殿の實檢に供へ候はん』

二人、馳せて、入間川に抵る、基氏、國清の二人、時に、此地に在り、

『竹澤右京亮、江戸遠江守こそ、首尾よく、新田左兵衛佐を討ち取り候へ、イザ、御實檢あらせ給ふべし』

酒に浸せる首を、其前に並ぶ。

國清、乃ち小俣少輔次郎を召し寄せて、

『如何に、此首、それか、あらぬか』

と問ふ、少輔次郎は、囊きに、義興に従うて、鎌倉を攻めたるもの、ヂツと、首を打ち守ること、暫し、

『仔細なき兵衛佐殿の御首級にて在はし候』

と言ひつゝ、ハラ／＼と、涙を垂るれば、居合はず將士、亦、袖を掩ふ、國清、喜ぶこと、限なし、

『能くこそ、剛敵を滅ぼしつれ、竹澤、江戸の勳功、拔群ぞ』

即座に、數ヶ所の庄園を、分ち與ふ、其席に居合はず將士、

『あはれ、弓矢の面目かな』

と羨むもあれば、

『扱て／＼、穢なき男の振舞や』

と密かに爪弾するもあり、褒むるも、譏るも、皆、面々の心々。

八

首魁、既に滅ぶれども、其與黨、尙、諸所に潛む、國清、

二人に向ひて、

『右京亮殿は、陣中に留まりて、與黨退治に力を添へ候へ、遠江守殿は、是れより、恩賞の地へ下られ候へ』

と告げて、良衡を留めて、堯寛を還へす。

堯寛、大に喜び、直に辭して、新領の地に、馳せ向ふ。

十月二十三日の夕暮、矢口の渡に着きて、船を待つ、程なく、二人の舟夫、種々の酒肴を載せて、船を前岸より、漕ぎ來る、是れぞ、嚮に堯寛の企畫に與みして、義興主従を、死地に陥れたるもの、

『遠江守殿、重き恩賞を蒙りて、下り給ふ所ぞ、定めて、我等にも、褒美を賜ふべし、急げ／＼』

船を漕ぎ／＼、中流に到る、こゝぞ義興、主従を沈めたるところ。

一陣の腥風、サツと、面を拂へば、満天、俄かに、掻き曇り、猛雨、忽ち降り濺ぐ、迅雷、おどろ／＼鳴りはためきて、山なす波浪、ドツと、舷頭を打つ。

舟夫、大に怖れ驚き、慌て、船を漕ぎ戻さんとす、雨は、益々強く、雷は、益々烈し、櫓は折れ、櫓は流れて、船體、

クル／＼と、舞ふこと、獨樂の如し。

二人の舟夫、忽ち逆巻く水に振り落されて、行方知れず。

堯寛、陸上より、此體を望み見て、縮み上る、

『這は／＼、只事にはあらじ、必定、左兵衛佐の祟にこそ、餘の所をこそ、渡らめ』

急に馬を驅つて、川上の方に馳せ上ること、二十餘丁。

風雨、追ひ來るが如く、雷電、攻め寄するに似たり、行けども／＼、果てしなし。

日は暮れて、家は遠し、堯寛、今は生きたる心地もあらず、

『免させ給へ兵衛佐殿』

手を合はせて、虚空を拜みつゝも、尙、馬を驅る、但ある山麓に辻堂の見ゆ、

『あれ／＼こそ、入らめ』

堯寛、頻りに、馬を煽る。

四邊茫茫として、樹もなく、竹もなく、高きは、只、馬上の我ればかり。

忽ち一簇の黒雲、サツと、堯寛の頭上に舞ひ下ると齊しく、奔電、眼を衝き、迅雷、耳を劈く。

金甲赤鎧の騎士、雲を驅つて、追ひ來り、矢を番へて、へ  
ウと放つと思へば、堯寛、眞逆様に、馬より墜ちて悶絶す。  
從騎、追々と馳せ來り、輿に昇き載せて、館に連れ還る。  
堯寛、手足を藻掻きくへて、苦しむこと、水に溺れし狀に  
似たり。

『あら堪へがたや、助けよ』

悶えに悶ゆること七日、義興の死してより、三七日目に、  
終に息絶ゆ。

九

堯寛の死したる翌夜、國清、入間川の陣中に在りて、睡ろ  
む。

忽然として、金鼓の響、呐喊の聲、黒雲の上になる、

『敵は何奴ぞ』

國清、仰いで、空中を見れば、二丈餘の猛鬼、牛頭馬頭を  
率ゐて、火車を引く、是れぞ、正しく義興、一聲、ドツと  
叫んで、基氏の陣營に馳せ入る。

『アナヤ』

とばかり、駭きて駈け寄りんとすれば、國清、忽ちに眠覺

む、

『扱ては、夢にてありしか』

言、未だ了らず、百雷、千電、一時に起りて、入間川の民  
家三百餘戸、忽ち灰と化す。

矢口の渡の近傍、亦、夜な、怪火あり、村民、相謀り  
て、一祠を建て、新田大明神と崇めて、義興の靈を祀る。

怪異、これより、復た現はれず。

南多摩郡稻城村に、矢野口と呼べる所あり、義興の難に  
遭へるは、此地にして、矢口は、義興主従の屍骸の漂着  
せし所なりと云ふ、江戸堯寛の入間川より、稻毛橘樹郡  
中原村、橘村、高津村の邊りに赴く時、渡らんとせし所  
なりとせば、矢野口を以て、是とすべきか、記して、參  
考とす。

筑後川

菊池武光大勝の處

筑後川は、一に千年川と曰ふ、源を肥後國阿蘇郡に發し、

豊前に入りて、日田川となり、更に、筑後に入りて、筑  
後川となり、久留米市の北を過ぎて、西南に流れ、肥前  
の國界を劃して、有明海に注ぐ、流域、三十餘里に及び、  
九州第一の巨川にして、利根川の坂東太郎、吉野川の四  
國三郎と、並び稱せられて、筑紫次郎の稱あり。  
正平十四年八月、菊池武光、征西將軍懷良親王を奉じて、  
少貳頼尙を討じ、大に筑後河畔に戦うて、之れを破る、  
是れ實に久留米附近の地なり。

菊花の香は、楠樹の香と、俱に馨ばし。

菊池武重、肥後に在り、義兵を提さげて、東征西伐するこ  
と數年、九國、服せんとして、未だ服せず。

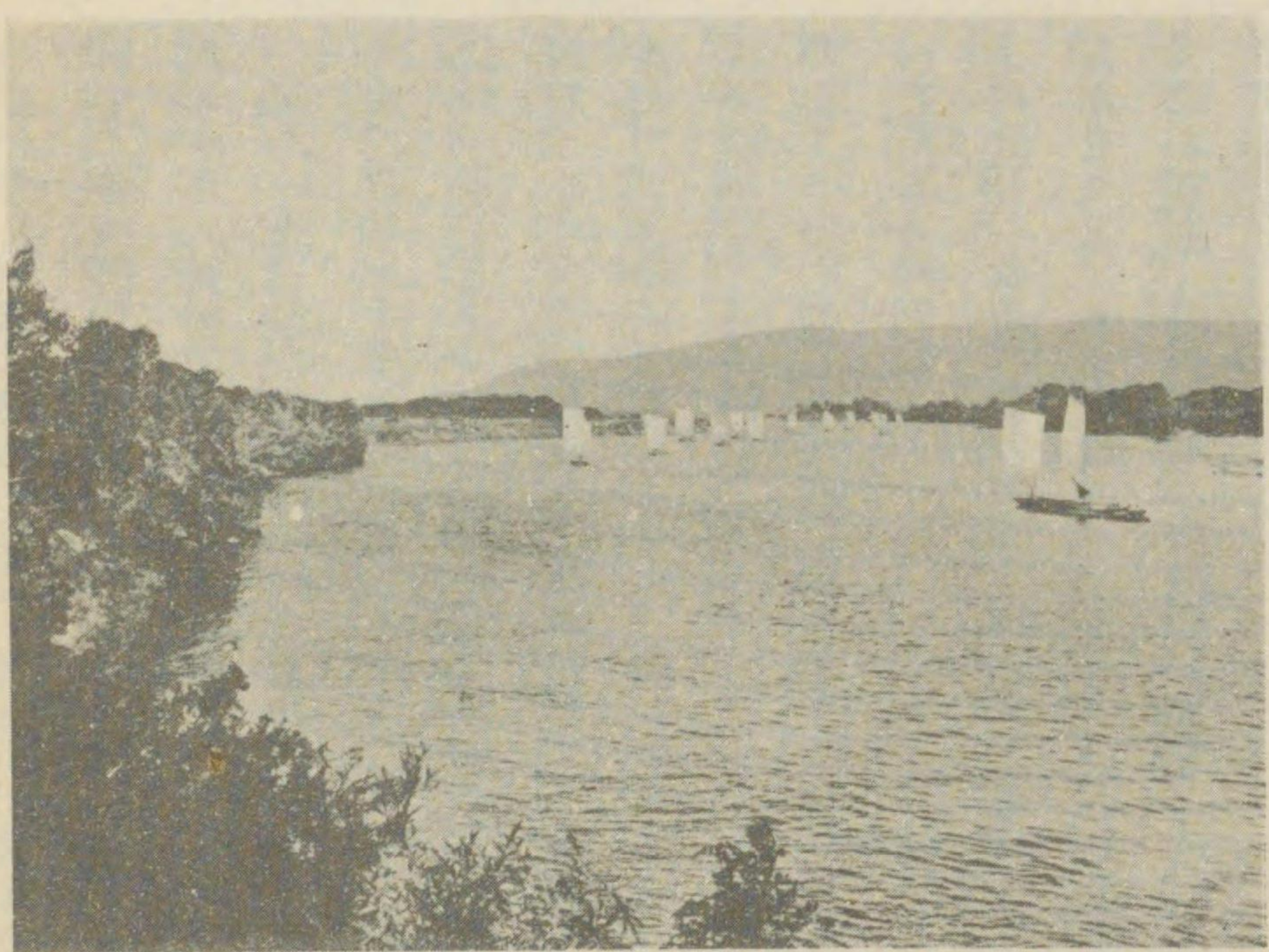
元弘三年、武重、書を吉野の行宮に上つりて、

臣武重、力を竭し、賊を討ずること數年、毎に掃蕩の功  
をこそ奏し候へ、隨つて服すれば、隨つて叛き、反覆聚  
散、更に、定まる所候はず、畢竟するに、地隔たり、情  
疎にして、天威の覃ぶ所を知らざるに基つき候はんか、  
願はくは、親王の内、御一人を下し給へ、九國の軍兵、

必ず、歸願仕つり候はん』

と請ひ奉つる、主上、御嘉納あらせ給ひ、式部卿懷良親王

筑後川  
此れは筑後國久留米市の附近を流る、筑後川にして菊池武  
光と少貳頼尙と激戦せしところ。



を、一品  
に叙して、  
征西將軍  
に任じ給  
ふ、是れ  
ぞ、第九  
の皇子に  
在はしま  
す。  
時に、道  
路塞がり  
て、通ぜ  
ず、乃ち  
此月九月、  
征東將軍  
義良親王

と與に、伊勢の大湊に赴かせ給ひ、義良親王は、東航し給ひ、懷良親王は、西航し給ふ。

會々颶風

の難に、逢はせ給ひて、海上に漂流すること若干日、漸く讃州に着かせ給ふ。

暫く、此地に駐りて、官兵を募らせ給ひ、四年の春、伊豫を経て、肥後の宇土の津に着かせ給ふ。

親王、菊池に入りて、令旨を、武重に賜ふ、

『汝の父寂阿、忠を天朝に盡して、二子と與に、命を賊鋒に殞す、其義勇、天下に比なし、今、汝も、亦、義兵を起す、天恩、豈、違ふことあらんや』

武重、感激措かず、

『武門の名譽、何物か、此れに過ぎ候はん、粉骨碎身、

今日の大命に、酬い奉つり候べし』

征西府を、八代の高田に開きて、親王を、此處に置き奉つる。

兵威、赫然として、忽ち遠近に振ふ。

二

親王、既に九國の節度を掌どり給ふ、

『イデ、此勢に乗じて、兇徒を討ち平らげばや』  
武重、將に武を四隣に用ひんとす。

此年八月、豊後の大友氏時、筑後に入りて、妙見城を抜く、

『さらば、先づ大友をこそ、攻むべけれ』

武重、自ら兵を率ゐて、筑後に入る、兵鋒、頗る鋭し。

氏時、斯くと聞くより、恐れて、豊後に引き退く。

武重、直に生葉、妙見の二城を攻めて、之れを復し、更に

進んで、筑後に入り、連りに、其七城を陥る。

官軍の兵勢、益々振ふ。

興國二年八月、武重、卒して、其弟武士家を繼ぐ、亦、親王を輔翼し奉つる。

三年五月、親王、親ら精兵を率ゐて、薩摩に入らせ給ひ、

島津貞久と、谷山に戦うて、之れを破らせ給ふ、島津忠國、

大隅助三郎、谷山五郎、鮫島彦五郎等、争うて、御味方に、馳せ參す。

親王、谷山の御所に入らせ給ひ、兵を分ちて、諸城を攻め降し給ふ。

三

五年正月、武士、奏し請うて、家を弟武光に讓る。

武光、最も勇武を以て、著はる、心を盡し、力を盡して、

親王を輔翼し奉つる。

豊後の大友氏時、筑前の少貳頼尙等、菊池氏の下風に立つ

を欲せず、武光と與に、鋒を争ふこと數年。

武光、兵を用ふること、神の如し、向ふ所、皆、摧く、終

に撃ちて、氏時、頼尙を降す。

九國、粗々平らぐ、畠山國久、獨り日向國六笠城に據りて

降らず。

武光、乃ち十三年十一月を以て、國久を日向に攻む、九國

の諸豪、反覆、常なし、氏時、先づ畔き、頼尙、亦、尋いで

畔く。

武光、兵を率ゐて、豊後に入り、轉じて、筑前に入る、氏

時、頼尙、敗れ走れども、尙、降らず。

是に於て、親王、先づ頼尙を撃滅せんと思し、十四年七月、

親ら軍を督して、筑前に向はせ給ふ、武光、逞兵八千騎を

率ゐて、從ひ奉つる。

頼尙、斯くと聞くより、兵六萬餘騎を率ゐて、出でて筑後川に陣す。

七月十九日、武光、手兵五千餘騎を率ゐ、筑後川を濟りて、

頼尙に迫る。

頼尙、敢て戦はず、退きて、大原に陣し、小徑を斷ちて、

待つ。

泥澤、前に在りて、近づくべからず、空しく、相峙するこ

と、二十餘日。

八月十六日、武光、兵を三隊に分ち、險を越え、川に沿ひ、

轟々たる灘聲だんせいに乗じて、軍を進む。

戦端、忽ちにして開く。

第一陣、先づ進んで戦ひ、第二陣、亦、續いて戦ふ。

敵の第三陣は、頼尙、自ら二萬餘騎を以て控ゆ、武光、望

み見て、奮ふ、

『アレ撃ち破れや』

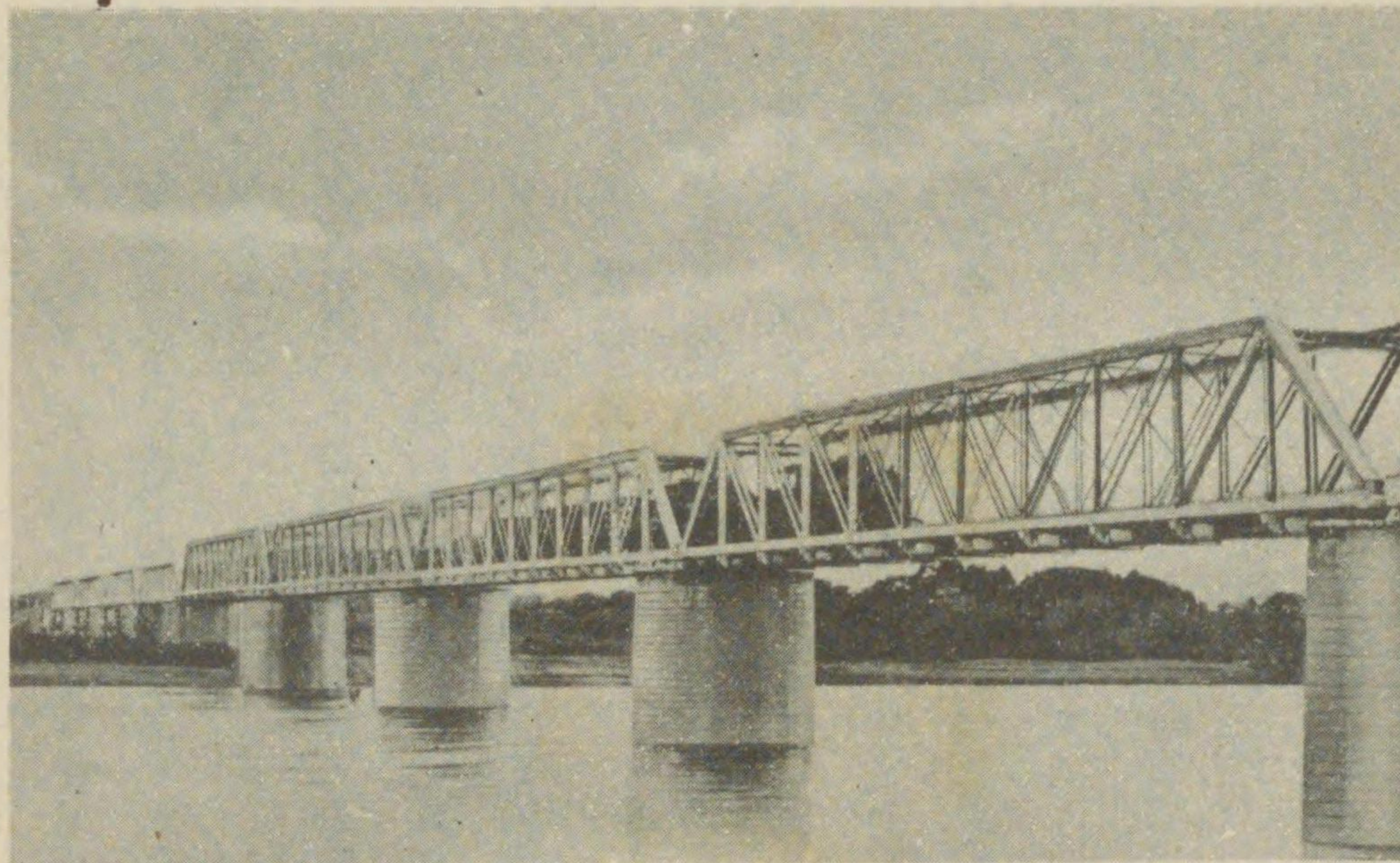
自ら三千餘騎を提さげて、突進す。

頼尙、忽ち令を下せば、一軍、サツと、左右に分れ、矢先

を揃へて、一齊に射る、萬矢、飛んで、雨より繁し、武光、



筑後川の鐵橋  
此れは筑後川に於ける鹿兒島線の鐵橋にして久留米市附近に在り。



意とせず、猛然として、益々進む。

親王、英武群に抜んで給ふ、親ら亂矢を冒して、挺進し給ふ。

一矢、忽ち飛び來つて、御身に中る。

親王、少しも、怯ませ給はず。二矢、又飛び來つて、中る。

親王、尙も、怯ませ給はず。既にして、三

矢、又飛び來つて、中る。

親王、尙も、怯ませ給へる御氣色もなく、益々馬を驅つて、進ませ給ふ。

敵矢、飛び去り、飛び來りて、親王の御身、益々危ふし。今は、黙視すべからず。

權大納言藤原親弘、中納言源信親、左近衛少將花山院重賢以下、公卿十一人、奮然として進み、一死、親王の危急を、救ひ奉つらんとす。

新田氏の一族世良田、田中、岩松、桃井、堀口、江田、山名以下三十三人、亦、從うて軍中に在り、斯く見るより、何かは躊躇はん、一千餘騎を以て、横さまに、敵の中軍を衝く。呼聲、湧くが如し、山岳、皆、震ふ。

親弘以下の公卿、皆、死し、世良田以下の新田勢、亦、敵と相搏つて斃る。

武光父子、大に怒つて、驀地に、敵を衝き、勇を振うて、戦ふこと十餘合、終に、大に頼向を破る、首を斬ること四千級。西南の官軍、復た頗る振ふ。

3/2  
2910  
591



日本史蹟大系  
第七卷

昭和十年十二月十七日印刷  
昭和十年十二月廿一日發行

〔二圓八十錢〕

著者 熊田葦城

發行者 下中彌三郎

東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷者 關口一男

東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷所 單式印刷株式會社

東京市芝區金杉新濱町二

發行所

株式會社 凡社

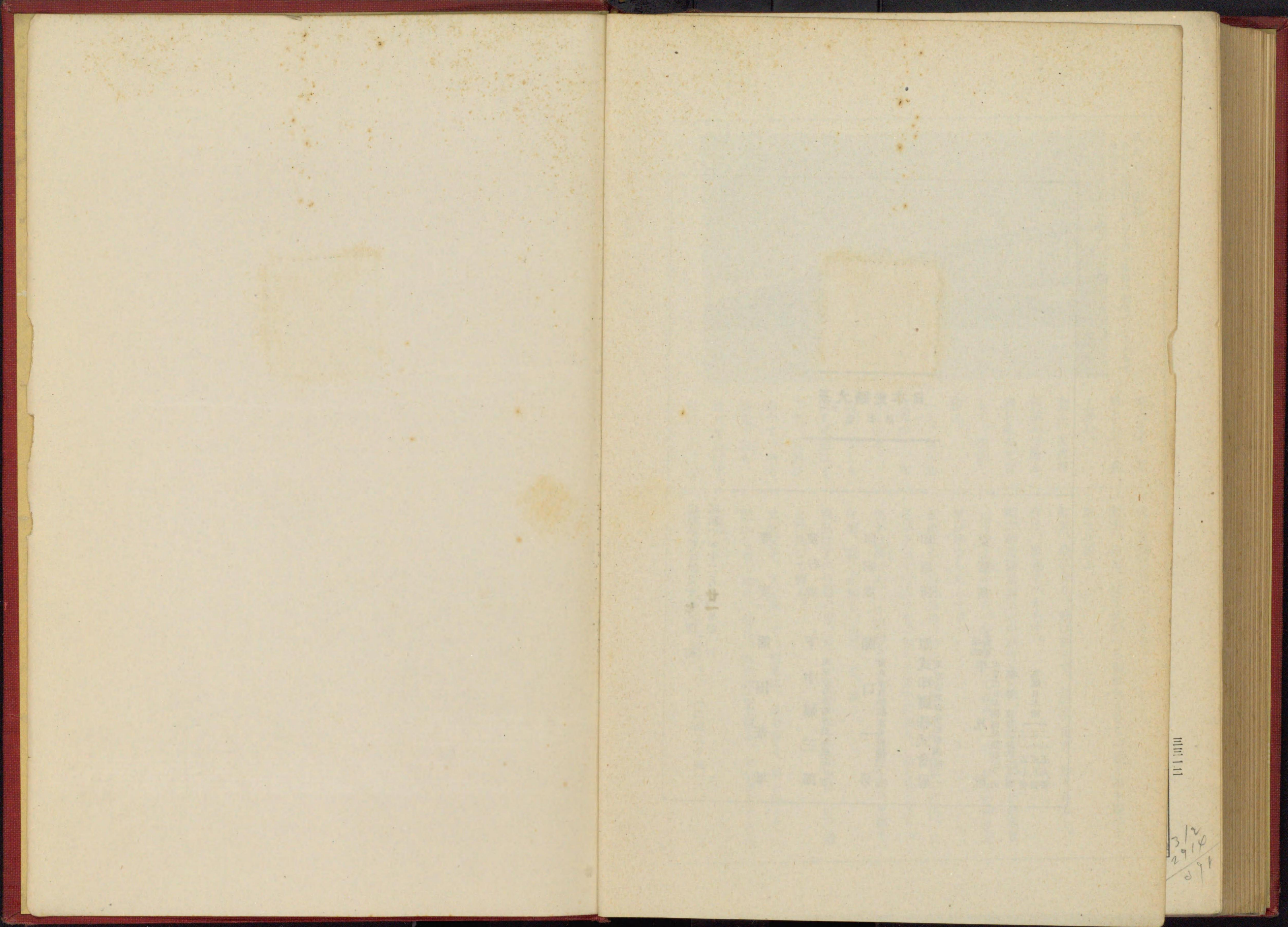
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

振替 東京二九六三九番

電話日本橋 二二一五七番

二二一五八番

五九八番



三三三三

3/2  
29/4  
591

670  
25

